

ジョウジフ・マッシーの学史的位置

——三上隆三『近代利子論の成立』（一九六九年・未来社）によせて——

小林 昇

1

ジョウジフ・マッシー (Joseph Massie) という名は、経済学史上にユニックな仕事を残しながらも久しく忘却され、その生涯さえあきらかでない人びとのひとりである。おなじ十八世紀のイギリスでいえば、ジェイコブ・ヴァンダーリントやウィリアム・テンブル (むろんサー・ウィリアム・テンブルとは別人) やジョウジフ・ハリスがマッシーと似た境遇におかれている。だがこれらの人物のなかでもとくに、マッシーの伝記のさだかでないことはいちじるしい。彼はその没年が一七八四年であること、ロンドンのセント・アンドルー教会に埋葬されたことがわかっていただけで、その職業も推測の域を出ない——砂糖貿易商だったという可能性が多いが——のである。

しかし、このマッシーが一七四八年ごろから一七六〇年にかけて一五〇〇冊 (ないし一六七二点) におよぶ、経済学文献の蒐集をおこない、それを手放してのちに手稿の『経済学文献目録』 (An Alphabetical Index of the Name

of Authors of Commercial Books and Pamphlets, 1765) を残してそれがこんにちまでブリテイッシュ・ミュージアムに保管されていること、また彼が利子論史上の重要文献『自然利子率論』を最初として約四〇〇点の論著を出版したということは、確定され事実である。彼はその同時代では、ジョウサイア・タッカーに次いで多産な経済論説家だったのである。

それなのになぜ彼は忘却されたか。それは彼のおびたらしい小冊子のうち、相当な学史的意義を持つものが上記の『自然利子率論』だけといつてよく、「政治算術家」としての彼は見るべき成果に達しなかったからであり、またこの『自然利子率論』さえ、のちに出たスミスの『国富論』の光輝のまゑにその存在を薄くしたからである。この点、有力な一冊の著書『貨幣万能』(一七三四年)を残したまま久しく忘れられたヴァンダーリントとマッシーとは、半面ながら似かよった運命を持っている。

しかし、比較的最近の論説であるマサイアスの業績を除いても、マッシーの利子論は、マッカロックやマルクスにはすでに注目され評価されていたのであつて、わが国でも、古く大正十四年に高垣寅次郎博士がこれに言及されて以来、高橋誠一郎博士(上記の『文献目録』をも解題)、高木暢哉教授らがかなり詳細にこの対象を分析されている。

わたくしも、もう二〇年も昔のことと思うが、当の『自然利子率論』すなわち *An Essay on the Governing Causes of the Natural Rate of Interest; wherein the Sentiments of Sir William Petty and Mr. Locke, on that Head, are considered*, London 1750 を、一橋大学のメンガー文庫にかよつて読み、いちおうの抜書きをとつたことがある。そのノートはもう黄ばんでおり、ボレックスフェンやペティなどからの抜書き(ハル版のペティも当時は簡単には入手できなかった)と一冊に同居している。こういうノートのつくりかたから見ても、わたくし自身は、のちにしばしば

『自然利子率論』に触れる論説を書きながらも、今までマッシーに十分な関心を払ってきたとはいいたい。ところが、理論家でありケインズの研究者であり、さらに学史の領域にも広く出入した『貨幣的経済理論の研究』の著者である三上隆三教授は、一〇年前にホランダーの翻刻版の『自然利子率論』に偶然接したとき、おそらくは氏の専門領域のゆえに、本文六二ページのこの小冊子のとりことなり、同時にその著者が忘却された人物であることを知って、その利子論を深く研究すること、および「極東の一孤島国で彼的全著作を読もうとする」ことをこころざし、マイクロフィルムの利用によってついにその目的を達成した。その成果が本書すなわち『近代利子論の成立』であって、それはxv+384p、マッシーの詳細な書目41p、人名索引7pから成る大冊であるばかりではなく、マッシーにかんしては、世界で最初の——万一にもドイツでの学位論文などに対象をおなじくする研究があるかもしれないが——理論的ないし学史的研究所である。本書のメリットとしてこの端的な事実がまず明記されなければならない。著者はこの成果を学界にもたらした動力を、みずから、「執念にも近いような筆者のマッシーへの傾倒ぶり」としるしている。

しかし他面、マッシーの諸論説のすべてを遍歴してのちの三上教授の実感には、本書の補論「マッシーの生涯と業績」で述べられているように、マッシーはその生来の経済論説家としてのすぐれた才能を伸ばすにはあまりにも時論家でありすぎ、研究対象を分散させることによってエネルギーを浪費し——またわたくしの思うところでは時論家としてもデフォーやタッカーの洞察力とヴィジョンとを欠き——、理論史的意義を担うそのほとんど唯一の著書『自然利子率論』が、マッシー自身にとって「底辺の狭い孤高の書」（四〇〇ページ）となっているということであった。したがって三上教授の本書は、マッシーの全労作を読破したという用意の上に立ちながらも、やはり彼の『自然利子率論』を中心として分析した研究となっている。著者は『自然利子率論』のほかに『イギリス通貨論』（*Observations*

relating to the Coin of Great Britain, 1760. 本文三二ページ)をも理論的なパンフレットであるとし(六五、四〇ページ)、それ以外にも、『各階層の租税の計算』(*Calculations of Taxes for a Family of each Rank, Degree or Class: for one Year, 1756*)などのように、マッシーの先人グレゴリ・キングのいっそう根本的・国民経済的な表——各階層の収入と支出との表——と対照させて分析してみたいという興味をそらせる労作もあるが、著者自身のみとめてゐるやうに、マッシーの全著作には、カンティロン『経済の本質』やステュアートの『経済学原理』にくらべられるやうな、理論的体系化はやはり見られないのである。

このことの結果、三上教授のマッシーへの傾倒は、この人物の「全著作を読もう」とする氏の目的を達成させたが、その結果として氏は、これらの全著作を批判的に再構成しようとすることの意義をみずから積極的には評価しないやうになり、こうして本書は、やはり近代利子論史上のマッシーに照明をあてた研究として刊行されたのである。むろん著者はそのはしがきで、「マッシー自身が行なつた研究範囲はひろく、したがつて、マッシーの完全な研究にはいろいろの視角——たとえば経済思想・社会思想・経済史・財政・貿易・社会政策等々——よりの分析が必要であり、本書のやうに利子論中心の研究は、およそ完全なマッシー研究といふにはほど遠いものといわなくてはならない」(六ページ)と書かれてゐる。しかし、マイナーなものをマイナーなものとして確定するといふ Resultat negativ であることと確認することも、ときには研究上不可欠な労働であつて、わたくしもステュアートの『経済学原理』第三編「貨幣と通貨」の分析をこころみたととき、このような考えに到達することによつてみずからを慰めたおほえがある。むろん、マッシーの多くの論説から今後いくつもの遺珠が発見されないとはかぎらない。しかしそれでも、わたくしは三上教授の研究の徒勞の反面にもやはり敬意を表しておきたい。そこには氏の客氣が感ぜられないではないけれど

も、やはり、マックス・ヴェーバーのつぎの言葉が、ことに昨今のように学問への沈潜をはばむ時代にあつては、『近代利子論の成立』を是認するために引用されるべきであろう。——「学問に生きる者は、ひとり自己の専門にとじこめることによつてのみ、自分はここにのちのちにまで残るような仕事を成しとげたという、おそらく生涯に二度とは味われぬはずの深い喜びを感じることができる。じつさに価値がありまた完璧の域に達しているような業績は、こんにちではみな専門家的に成しとげられたものばかりである。だから、自分で目かくし革をつけるようなことのできない人や、また自分の全霊をうちこんでたとえは或る写本の或る個所の正しい解釈を得ることに夢中になるといったようなことのできない人は、学問にはまず縁遠い人びとである」（『職業としての学問』）。

2

しかし、本文六二ページの『自然利子率論』をまぎれもない主対象として、どうして本文三八四頁の大冊『近代利子論の成立』を書くことが、三上教授にとって可能だったのであろうか。それは父カールペッパからリカードまでの二〇〇年間にわたるさまざまな利子論の検討をたての糸とし、マルクスやケインズの利子論の理解を横の糸として、そのなかで『自然利子率論』のユニックで積極的な学史的位置と理論的意義とを明示するという構成を、三上教授が本書で用いたからである。そうしてこのたて糸と横糸とは、本書では有効に織りなされながらも、たて糸の部分にかなする叙述の領域と視野との広さは、横糸の部分にかなするものよりも比重が大きく、したがって本書は学説史家三上隆三の存在を、同氏の上掲の原著『貨幣的経済理論の研究』とともに、いなそれよりもたしかに強烈に、印象づけるものとなった。『近代利子論の成立』は、その研究の手つづき、その諸考証の方法の点でも、まさしく本格的な学

史的業績であつて、われわれは本書に、理論家から学史家への転身という、比較的すくない事例の一つを見るわけである。

右の事情は本書の諸章の配列と、それら諸章の各節の構成からよく知られる。この前者だけをここにしるせば、序説 経済学の揺籃期、第一章 十七世紀イギリスにおける利子論争、第二章 マッシーの利子論、第三章 マッシー利子論の周辺、第四章 近代利子の特質、補論 マッシーの生涯と業績、なのであつて、しかもこの中の第四章も、その第一節が近代利子の歴史的な性格と題されて、グレンシャムの著作とされる *For the Understanding of the Exchange, c. 1560*、匿名者の *A Discourse upon Usury, 1692*、ペティ、カンティロン、ケネー、ハチスン、スミス、リカード、およびケインズを取扱い、第二節がマッシー利子論の意義と題されているが、この二つの節が全章を成しているのであつて、この章もまた学史的な分析であることが知られるのである。

ジョウジフ・三上教授は本書で、Anderson, J.; Barbon, N.; Briscoe, J.; Cantillon, R.; Cary, J.; Chamberlen, H.; Child, J.; Coke, R.; Culpeper, the elder; Culpeper, the younger; Davenant, C.; Portrey, S.; Gee, J.; Harris, J.; Hume, D.; Hutcheson, F.; King, C.; King, G.; Law, J.; Locke, J.; Malynes, G.; Manley, T.; Misselden, E.; Mun, T.; North, D.; Petty, W.; Posthwayt, M.; Quesnay, F.; Smith, C.; Steuart, J.; Tucker, J.; Turgot, A. R. J.; Vanderlint, J.; Voltaire, F. M. E. の「スミスの先人の業績をさまざまな角度から利用しているのみならず、たんに言及している重商主義者たちの名は右の範囲よりいっそう広汎であり、そういう人物やその諸説に対する研究文献も、マッカロックやロッシヤ以来レットウィンその他にいたるまでかなり十分に利用されているのである。だから本書は、ケネー、テュルゴー、スミス、リカード、およびそれ以後の諸文献に対する分析

の部分を除いても、重商主義の研究書としてだけでその存在を主張できるものであり、とくに第一章―第四章をつうじては、マッシーの最高の論敵であったロックの利子論がそれ自体として詳細に吟味されていて、それは本書にロック研究の一文獻としての資格をもあたえることを許すであろう。

以上のことを述べたのちでならば、ここであだちに、マッシーの利子論の内容、その学史的位置と意義とについての、三上教授の理解と主張とを聞くことが、すでに最も有益であろう。

まず、利子の源泉と利子率の決定とについて、『自然利子率論』はどのように論じているか。この書の最終章「自然利子率の規制的諸原因について」(On the Governing Causes of the Natural Rate of Interest [p. 47—62])におけるマッシーの主張を、三上教授の説明に従いつつ跡づけてみよう。――「マッシーの利子についての積極的理論は、まず、なぜ利子が支払われるかという問題から始められる。……「彼によれば」(以下「」内は小林)商品の所有者は、物それ自体にたいしてと同様、その商品がもたらすすべての利益にたいしても権利をもっている。したがって、ある商品を借りたものは、その商品が生みだした果実、すなわち利益についても、商品自体と同様に、その所有者にたいしてある義務を負うものである。したがってもしも一〇〇ポンドの貨幣を一年間活用した結果、経常的には、困難や危険の費用をつぐなうたうに、なお五ポンドの利益をあげうるのならば、……「この借手は」当然に借入れ金の返済時には、元金の一〇〇ポンドとともに、一年間に経常的にはその元金が生み出すであろう利益五ポンドをも支払わなければならない。たとえ借り手が五パーセントの利潤をあげなくても、借金すればそれだけのプレミアムは支払わねばならないのである(「以上の説明の部分は、高木暢哉『利子学説史』(一九四二年)、二〇四―五ページに翻訳文として掲げられている」。しかし逆に、五パーセント以上の利潤をあげても、支払うものは五パー

セントのみのプレミアムでよいのである。いま、この五パーセントによって示される内容そのものが自然利子および自然利子率なのである。したがってマッシーは、利子が支払われるのは、貸し付けられた元本が利潤を生むからと答えることによって、利子の源泉は利潤であるという考えを明白にしたわけである」(一八三—四ページ)。それはのちにアダム・スミスが定式化したのとおなじ考えである。そうしてマッシーのばあい、この利潤↓利子という考えが消費貸借に対してもおし拡げられ(その逆ではなく)、借手が借金によって利潤をあげることが一般的に可能であるかぎり、どんな性質の借手も利子を支払わなければならないとされる。この考えは、マルクスの認識、すなわち、資本として機能する局面での貨幣の使用価値は資本に転化した貨幣の生産する利潤に存する、という認識と同様のものである。

したがってマッシーのばあい、「借用したものの使用にたいして利子として人々が支払うものが、その借りたものの作りだすことのできる利潤の一部分(a Part of the Profits)であるならば、この利子はずねにそれらの利潤(those Profits)によって規制されねばならぬ」(Natural Rate of Interest, p. 49)ということになる。こうしてマッシーは、「ベティやロックにみられるような、利子率を規制するもの、基準を、地代や土地の購買年数といった封建制的要因にもとめることを排除し、利潤率、ヨリ正確には一般利潤率という近代制資本関係・要因のみにこれを求めたわけである」(一八五ページ)。したがって具体的にいえば、自然利子率は一般利潤率によってその上限を劃されるわけであるが、その範囲でどこにおちつくかは、資金に対する需要と供給との関係できまると考えるべきである。しかもいっそう具体的な点で、マッシーはロックとスミスをつなぐ認識の伝統の中間に立って、利潤と利子とは折半されるのが妥当であると述べたのちに、とくに、一般利利潤(common Profits)以上の特別利得(extraordinary Gain)

は借手に帰するものであることを指摘している。こうして、貸手の受けとるものは一般利子率 (common Rate of Interest) であり、借手の手に残るものは、平均利潤率の支配下でなお個々のばあいには差違を見せる利潤率からこの一般利子率を引き去ったものである、ということになる。しかし、以上の理論的展開のちにマッシーがとくに法則 (Rule) として樹立したかったことは、「自然利子率は個々人にとってのトレードの利潤 (the Profits of Trade to Particulars) によって規制される」(p. 51. 一八六ページ) ということであつた。

ところで右の展開に対する三上教授の理解に従えば、マッシーにあっては、「利子が利潤より派生したものである」ということは、利子がそれぞれの企業の具体的利潤の一部分を構成するという關係にたつものではなくて、むしろ經濟全体として生みだされた利潤の平均率——マッシーの言葉では一般的利潤 (common Profits) ——にかかわるものであり、かかる利潤率によって利子率が規制されるものであるということ」が知られていたということであり、また「利子率を規制するといわれる利潤率は、平均的な諸条件のもとで資本があげうるであろうと考えられる一つの抽象的な社会的平均利潤率であつて、かかる平均利潤率を成立させる根源は、あくまでも個々の企業によって生みだされる具体的な利潤率の存在ではあるが、それが直接には、社会一般に通用する利子率を規制しているものではないということ」が知られていたということである (一八七ページ)。

そうして、ここにいう一般的利潤が上記のように近代的な平均利潤率と考えられるべきものであること、マッシーが「一般的利潤率とともに利子率を考えたということは、その背後に初期産業資本の發展という事実の存在の觀念的反映を物語るものであり、ひいては彼が初期産業資本育成のための保護主義者でもあったことに結びつくのである」というのは、いわゆる前期的資本の時代には、一般的な利潤率・利子率は存在せず、存在するものは個々の偶然的・

特殊利子率と利子率、あるいは投機的なそれであつたからである」(一九〇ページ)ということは、利子論史上の決定的転轍手、近代利子論の眞正の樹立者としてマッシーを評価しようとする、著者の主張の理由づけと歴史的根拠とであつた。このようにしてまた、「マッシーの common Profit と extraordinary Gain たる用語法をみると、その量・質において、また時代的制約において大きな隔差があるとはいへ、マルクスによつて完成された平均利子率・特別利潤・特殊剰余価値概念の胎動をここに見出すのである」(同上)という指摘にまで、著者の叙述は進んでいる。ただしこの指摘そのものが、平均利子率にかんして、すでに平瀬巳之吉教授の『経済学の古典と近代』(一九五四年、三五三ページ)に示されていることは、著者も言及しているのではあるが。——だが、以上のような論述からマッシーに対してあたえている、三上教授のつぎの評価は、むしろ氏に学問的決断を必要とさせたであらう。「マッシーはグレート・ネームでもなく、またカンティヨンやヒューム以下のものであつても、彼の利子論の内容そのものにおいては、彼等同時代人にいささかの遜色をもみせるどころか、逆に数段抜き出ているといつても過言ではない。マッシーを経済・利子学説史において位置づけをこころみるならば、実にマッシーは利子論におけるスミスを先駆してあまりあるものといふのである。スミス理論の完成者としてのマルクスにおいてさえ、価値・剰余価値理論による基礎づけ以外にはそれになんの改良の手も加えられなかつたのである。しかし『自然利子率論』は」それだけのものではなく、もっとひろく、現代利子論のすべてが立つ基本利子原理を提供しているものといふのである」(二二六ページ)。(この視点からする著者の特自なケインズ理解については、三〇二—五ページを参照)。

上掲の『各階層の租税の計算』の存在をいちおう保留するとすれば、マッシーは成功しなかった政治算術家であったが、その経済学書のコレクションの読破から得た彼の体験は、彼に政治算術家の枠をこえること、経済学の確立のためには必要な材料の取捨選択がおこなわれている歴史的説明 (Historical Account) の必要なことを実感させた。彼が小冊子『経済学論』(A Representation concerning the Knowledge of Commerce, 1760) でこの必要を力説したことを、われわれは三上教授の手引きによって知ることができる(五六―八ページ)。だが、そこに存する問題点にはのちに触れることとして、ここではふたたび『自然利子率論』にたちもどって、マッシーがロックの利子論のふくむ前近代的要素から脱却するために、政治算術的方法と結合した一種の歴史的方法を用いたことを、確認することには若干の興味がある。

『近代利子論の成立』の第一章「十七世紀の利子論争」は、文献の取扱いの点でも、理論的分析の点でも、きわめて密度の高いすぐれた章である。それは父カルペッパーにはじまってロックに終る、いわゆる第一次・第二次の利子論争を、たくみに整理しつつ跡づけて、この論争が利子引下げ↓経済繁栄という論理を政策的主張の基礎とする、利子引下げ⇨原因論と、利子率は貨幣量によって規制されるものであるから利子率への統制は無効かつ有害であり、その低下は外国貿易のプラスに期待すべきであるとする、利子放任⇨結果論との、二つのグループによって戦わされつつ、ロックの出現によって結果論の勝利に終わったプロセスを明確にしているのみならず、この利子放任⇨結果論が、十八世紀にはいって、ロー、カンティロン、テュルゴーらを支配し、労働価値論史上の一古典である匿名者の『貨幣・公債利子論』(Some Thoughts on the Interest of Money..., 1738?) を例外として、利子引下げ⇨原因論の殿将であるステュアートをも制肘した事情を指摘している。

こゝういふ事情のもとにありながら、『自然利子率論』はどういふ新しい——むろん原因論とはまったく別の——論理でロックを批判したのか。この冊子はもともとロックの批判を目的とし、開巻と同時にそれが展開されるが、その論点は、自然利子率が第一には貨幣量に対する負債の量の比率によつてきまり、第二には貨幣量に対するトレードの量の比率 (in Proportion to the Trade of a Country) によつてきまるといふ、ロックの主張 (cf. J. Locke, *Some Considerations of the Lowering of Interest, and Raising the Value of Money*, 1692, pp. 9—11) に集中される。マッシーによれば、まず、ロックの第一の論点は歴史的事実に反する。なぜなら、こんにちと過去との比較は、ロックのあげたバミュータ島の例にもかかわらず、むしろ奢侈の風潮のもたらす負債の額の増加にもかかわらず、利子率はかえつてこれに逆行して低下していることを示すからである。——だが、三上教授の指摘するように、ロックは右のばあい、「住民相互の負債に比して一国の貨幣が僅少すぎるとき」に自然利子率が引上げられると述べて、貨幣量が時代によつて変化することを否定していないのだから、この点ではマッシーのおこなつた批判は的はずれである (一六六ページ)。だがこのばあいマッシーは、公債が政府の消費信用であつて生産者への貸付けではないこと、後者の利子率のみが利得の率に制約され、前者の利子率は借手の必要によつてどうにでも動くものであること、を指摘して、「国債の利子率と経済的市場的な利子率である彼らいう自然利子率とは全く別個の原理によつてきまるものである」といふことを明確にした (一六七ページ)。この論点は、マッシー自身の利子論が成立するための理論的前提である。

なお、ついでながら、マッシーが右の論点にかんして、「自分の土地を改良するために借金するジェントルマンや、トレードをいとなむために借金する商人や実業人は、彼らの越えることのできない限界を持っている。彼らが貨幣を

使つて一〇パーセントを得ることができればいいには、彼らはこの貨幣に対して五パーセントをあたえるであろうが、一〇パーセントをあたえようとはしないであろう」(pp. 31—2)と述べていることに、注意を払っておきたい。これは利潤・利子折半の考えだが、さきにマッシーが、一〇〇ポンドの借入れ金が経常的に五ポンドの利益をあげるものならば、元本の返済時にはこの五ポンドをも支払わねばならないと述べたとして、三上教授の説明を紹介したにもかかわらず、マッシーの真意ではむろん、ここにわたくしの引用した文章での五パーセントが自然利子率なのであつて、経常的な五ポンドの例がそうなのではない。三上教授はとくにこの点について、前近代的な高利子率は労働の全剰余の地主による収奪とパラレルな現象であり、金銭の貸借にあたつて地代率を考え、地代率・利子率を推論するペティ・カンティロンの伝統はここに根ざしていること、マッシーが決定的にそこから脱却したことを、強調しているのである(第四章第一節)。

ロックの第二の論点に対するマッシーの批判は有力である。マッシーはみずからに混乱をふくみつつも、ロックのなかに無意識に並存する、貨幣の流通必要量的見解と貨幣数量説の見解との矛盾を指摘して、「一国の貨幣とトレードとの間の釣合い不釣合いということ」「すなわち流通必要量」は話の種にはなるが、無意味なものである。交換商品としての貨幣の価値は、その数量が変化するに依つて騰落するのであるから、貨幣の豊富な時、多額の貨幣は労働者の賃銀・地主の年収入、あるいはブローカーの取引の支払いにおいてなにごともおこさないであろう。貨幣が稀少な場合も少額の貨幣は同様になにごともおこさないであろう。したがつて、この場合、どこで釣合いが成立するのか、不釣合いがはじまるのかわからないのである」(pp. 37—8)と指摘して、みずからは一貫して数量説の立場を採る。マルクスがこのマッシーの立場を検討することから「貨幣数量説批判への理論的突破口を」見いだしたとする三上教授

の推測（一七三ページ）は、たんなる推測にとどまっているが、ともあれマッシーはこの理論的立場を、歴史的だと彼みずからが考える方法と結合して、フリートウッドの『物価年表』（*Chronicon Preciosum: or an Account of English Money, the Price of Corn, and other Commodities, for the last 600 Years...*, 1707, 2nd ed., 1745）を駆使しつつ、ロックの利子論——「法定最高利子率の引き上げがトレードの發展をはばむことを重視し、その原因として利子率の引き上げがトレードに必要な一定比率の貨幣量の不足を招来すると考え、さらに、その背後に、貨幣量の多寡によって利子率が規制されるという利子率決定理論をもっていた」（一二四ページ）——の核心を批判しようとするのである。

マッシーはまず、理論的ならびに政治算術的検討を加えたのちに、価値が時代によって変化しない商品として小麦を採る。これは「不変の価値尺度」論の先驅である。そうして彼はこの前提から、各時代の貨幣量の多寡はとうぜんそれぞれの小麦の価格に反映すべきこと、したがって貨幣量と利子率とを結合させるロックの理論を採るとすれば、各時代ごとに小麦の価格と利子率とのあいだに反比例的關係が一貫して見られるはずだと述べ、それが実証できないことを、フリートウッドに拠りつつこれを補完した簡潔な表、すなわち「利子率と小麦価格との表」（A Table of Rates of Interest, and Prices of Wheat [p. 44]）によって示しているのである。三上教授はこの表の内容を説明しているが（一七七八ページ）、¹⁾ここでは直接に表そのものを示してみよう（次ページ）。

この表はそれ自体としては難解な点を持たない。マッシーはこのような手続きで、ロックの利子論の第二の論点を打破できるとした。この手続きは正しいとはいえないけれども、事実の客観的把握への努力を、三上教授はここに認めている（一七九ページ）。最初に述べた、『自然利子率論』における積極的理論の展開は、この批判にひきつづいて

「小麦の価格は、クォーターあたりのもの——小林」

小麦の価格によって決定された、交換される商品としての貨幣の価値、ないしトレードに対するその比率		さまざまな相隔 たった時点における法定利率	さまざまな相隔 たった時点における自然利率	もしも貨幣が最近の20年間にトレードに対して持った比率が自然利率の4パーセントだったことの理由だとすれば、ロッキ氏の法則にしたがえば、それは以下のように変らなければならないはずである。
平均価格の採られた年 間	ごんにちの貨幣での価格			
1444 — 1460	l. 0 s. 12 d. 1	法定されず	ほぼ10パーセントだと思われる	9½
1646 — 1665	2 17 5¼	8%	7%	2
1666 — 1685	2 6 3¼	6	5	2½
1686 — 1705	2 5 9¾	6	5	2½
1729 — 1748	1 8 6	5	4	4

おこなわれるものもある。

消費利子と資本利子との区別、法定利率と自然利率との分離、利子の源泉が利潤であるという認識、したがって自然利率は利潤によって規制されるという判断、この利潤率が低下しつつあることの把握、「利潤率」[ひいては

利子率」はトレイドの量とそれにたずさわる人々の数との比率によって規制される」(二〇三ページ)という意見、この点にかんして保護主義とともに他の一面でおこなわれた政治的・経済的自由の主張(二〇四ページ)——これらによってマッシーは、地代率・利子率という思考を根底とする前近代的利子論をほぼ完全に振り切った。しかもそのうえ三上教授の強調するところによれば、マッシーのばあい、利潤とは一般的利潤 (common profits) であり一般利潤率 (general rate of profit) を持つものであつて、これらの概念はその内容の点で、「たとえばマルクスのいう一般的利潤率 (allgemeine Profitrate)」、あるいは平均的利潤率 (Durchschnittsprofitrate) に匹敵するものである」(三二五ページ)。事実マッシーは、さきに引用した『自然利子率論』のなかの言葉、「自然利子率は個々人にとつてのトレイドの利潤によって規制される」という表現をみずからなほ不十分と考へ、それより一〇年後に刊行した『イギリス鑄貨論』(前掲)では、さきの言葉をいいなほして、「年収入を生むことのできるものとしての貨幣の価値は、各国のそれぞれにおける個人にたいするトレイドの一般的利潤 (the common profits of trade to individuals) によって規制される」(*Observations relating to the Coin of Great Britain*, p. 2. 一八八ページ)と述べているのである。——三上教授は、博搜の成果であるこの文章の発見に力づけられて、マッシーの利子論の近代性、その点での学史上の截然たる卓越を強調する。こうして、「マッシーこそ真の近代利子概念の発見者——利子論をして、科学的経済学における正規的構成要素としての理論的市民権を獲得しうるまでに發展せしめた人物といふのである」(三二二ページ)という、究極の評価が生まれる。

わたくしはマッシーへの三上教授の傾倒に敬意をいだく者であるし、『自然利子率論』に対する氏の学史的位罫づけにも積極的な意義をみとめたいと思う。ただ、マッシーの一般的利潤ないし一般利潤率がマルクスの一般的利潤率

ないし平均利潤率に「匹敵する」内容を持つ概念だという、三上教授の主張には、学史の研究者の一人として疑問をいだくことを避けられなかった。周知のように、平均利潤率という概念は、スミスの『国富論』第一編第七章の冒頭に、つぎのような文章のなかでも明示されているものである。「あらゆる社会またはその近隣には、労働や資財のさまざまな用途ごとに、賃銀と利潤との双方についての通常率または平均率 (ordinary or average rate both of wages and profit in every different employment of labour and stock) というものがある。わたしが後段で明らかにするであろうように、この率は、一部はその社会の一般的諸事情、つまりその貧富、その進歩、停滞または衰退の状態によって、また一部はおのおのの用途の特殊な性質によって、自然に規制されるのである」(大内・松川訳『諸国民の富』、二冊本、一四三ページ)。そうして、これもまた周知のように、スミスは停滞的状态にある国としては中国を、衰退的状态にある国としてはインドのベンガルをあげることとなるのだから、スミスのばあいの平均利潤率が近代産業資本の利潤率だけをいうものでないことはたしかである。ところがマッシーもまた、こういうスミスと照応するように、利率率の空間的差違にかんして、三上教授の紹介に従えば、「イギリスの利率率が四パーセントであり、オランダが三パーセント、フランス・ドイツ・ポルトガルが五または六パーセント、西インド諸島・東インドが七、八または九パーセント、トルコが一〇——一二パーセントであって、それらのすべてが同一利率率でないのも、それぞれの国の利潤率がそれぞれに異なっているからであると答えるのである」(一八八ページ)。

そこで、マッシーが一方に近代的な平均利潤率の概念を樹立しつつも、他方で右のようなスミスの説明をするのは、三上教授によっても彼の「不注意といわなくてはならない。封建制社会の利率率」高利貸利率と資本制近代的利率率とはその水準の決定原理が違うのである。したがって経済体制の相違を無視して、性格の違う利率率より逆算

して国民経済的・地域的利潤率を比較計算することには意味がないのである」(一八九ページ)ということになる。だが、それでもなお、三上教授は右にすぐつづけて、「しかしそのことはマッシーの創始した利子理論の意義を否定することにはならない。それはたんなる空論ではない。ただその適用の方向が誤っていたにすぎない。彼の利子原理は彼の未来の彼の時代以後、すなわち資本制経済の発展とともにますますその眞価を發揮するものである」(同上)と強調される。

三上教授の考えかたには理由がある。ジェイムズ・ステュアートは、一七五八年にはすでに脱稿していた、彼の『経済学原理』第二編で、トレードが確立された国では製造業は一定の販路、労働の規制された「ほどよい意」価格、およびインダストリから生ずる一定の利潤(certain profit resulting from industry)によって、かならず繁栄する……」(*Principles*, Bk. II, Chap. iv)と述べ、すすんべつの一定の利潤を妥当な利潤(reasonable profit)と呼んでいるのである(Chap. x)。資本制経済の発展にともなう、平均利潤率の概念の確立のためにはその機が熟したかに見える。

しかし、われわれはここで十分に注意深くなければならない。右のステュアートのばあい、商品の価格の諸構成要素についての相当詳細な分析がおこなわれており、妥当な利潤はさらにすすんで高すぎない利潤(moderate profit)という表現をもあたえられているが(ibid.)、それでも、利潤とは結局、流通過程において生ずる譲渡利潤(profit upon alienation)なのであり、本来の産業利潤の認識についてはかすかな萌芽がみとめられるにすぎないのである。

そうして「利潤」が譲渡利潤であるかぎり、産業、資本家の、近代的な利潤は労働者の賃銀と区別されずに、現実価格(real price)すなわち生産費(prime cost)のなかに組みこまれる(Chap. iv)。つまり、ステュアートの段階では

まだ、原始蓄積という基礎過程に制約されて、経済は単純商品生産のモデルで、生産は独立生産者のモデルで把握されていたのであって、そのかぎり資本家と労働者との区別は分明でなく、したがってまた利潤範疇と賃銀範疇との区別もあいまいであった。だから、第一に、profit といひ wage という言葉がスミス以前の文献にしばしば用いられているとしても、それはカッコつきの「利潤」であり「賃銀」なのであって、トレードによる common profits といつても、そこに賃銀部分が混入していることは、逆に wage のなかに利潤部分が混入するのとおなじく、ふつうのことであつたし、第二に、独立生産者がプロレタリアートとちがって商品販売者の機能を兼ねたかぎり（スミスの「商業社会」）、利潤が流通過程から生ずるという観念は避けがたかつたのであって、それはペティにおける剰余利得 (superfluous) の概念が重金主義的帰結をともなつたこと（渡辺輝雄『創設者の経済学』、第一篇第四章）とも結合する、重商主義の理論的制約なのであつた。

だから、マッシーのいう common Profits は、正しく訳すれば一般的「利潤」ないし一般的利得なのである。それにまた、スミスのばあいの平均利潤率が profit の語を単数で示しているのに、マッシーのいう一般的利潤が複数であらわされていることにも、われわれはいちおう注意を払っておきたい。こうして、さきに触れたように、平瀬教授がマッシーの理論と平均利潤率の思想とを結合させたとしても、それは前者が後者の「胎動」だという意味にしかすぎなかつたことに（平瀬、前掲、三五三ページ）、われわれは留意しておかなければならない、その点以上にマッシーの『自然利子率論』を評価することは——三上教授はこの点で注意ぶかくないことはないが、すでにしるしたところからも知られるように、氏のマッシーへの傾倒ぶりは、必要な自己制御をあやうく越えそうである——、結局マッシーに対する過大評価ということになるであらう。

利潤が剰余価値の一部であつて、勤勞所得である賃銀とは別個の範疇であること、利潤率と賃銀率とのあいだにはさまざまな対立關係があること——資本主義の經濟的・社会的分析にとって決定的に重要なこの認識は、テュルゴーをかすかな先驅者としてスミスが最初に確立したものであつた。また、いわゆる進歩的狀態にある北アメリカやイギリスでは、前期的独占を排除しつつ相互に競争を深める諸資本が、低率の、近代の意味での平均利潤率を成立させつつあるという認識も、タッカーについてスミスが明確にしたところであつた。だが、スミスのこういう認識は、分業論を前提とする彼の商品論——交換価値の理論的・体系的分析——の展開のなかではじめて成立したものである。このことは語を換えていえば、スミスがはじめて学史の原始蓄積段階を脱し、資本制的蓄積の段階の出発点に立つた者だつたといふことを意味する。マッシーが利子を利潤からの派生物として捉え、そのうえこの利潤を一般的利潤のことだと述べたことは事實だが、このばあいの利潤が資本家の所得であつてそこに賃銀部分をふくまないという認識は、はつきりと示されているわけではない。われわれはこの單純な事實を知つたうえで、マッシーの利子論の持つ近代性、あるいは近代への萌芽性を理解しなければならない。利子論史上での転轍手としてのマッシーの位置は確立しているけれども、その位置は重商主義を大きく転換させることのできる位置ではなかつたわけである。狹義のドグマングシヒテの上でマッシーの占める意義は、広汎な經濟思想と經濟理論体系との流れのなかでは、結局大きいものとはいえないであらう。ケネーやテュルゴーはむろん別としても、カンティロン、ヒューム、タッカー、ハリス、ステュアートらの名にくらべて、マッシーの名はやはりマイナーであることを免れないのである。三上教授の力作である本書がいくぶんかの不調和感をまといつてゐるのは、つまりはこの理由によるものであらう。

マルクスによれば、平均利潤率はつぎのようにして成立する。「諸商品がその価値どおりに売られるとすれば、すでに展開されたように、相異なる諸生産部門において、そこに投下された資本量の相異なる有機的組成に応じて、甚しく相異なる利潤率が生ずる。しかし、資本は、利潤率の低い部門から去って、より高い利潤を産む他の部門に移る。この不斷の出入移動によって、一言でいえば、かしこでは利潤率が下がり、ここでは上がるというのに従って行なわれる種々の部門のあいだの資本の分配によって、資本は、種々の生産部門における平均利潤が同じになるような、したがって諸価値が生産価格に転化されるような、需要にたいする供給の比率を生ぜしめる。与えられた一国民社会における資本主義的發展が高ければ高いほど、すなわち、当該国の状態が資本主義的生産様式に適合していればいるほど、資本は多かれ少なかれ、この均等化を達成する」(『資本論』第三卷第二編第一〇章、岩波文庫版第六分冊三〇六—七ページ)。

——労働価値論にもとづく交換価値の分析(それが資本主義の分析にみちびく)が、スミスおよびリカードにおける挫折を経て、生産価格という概念の成立を可能とさせるような平均利潤概念の樹立をつうじて、マルクスによる解決に到達するまでには、長い理論史的な苦闘があった。ところが三上教授は、右のマルクスの文章を引用した直後で、「したがって、マッシーの一般的利潤率なる概念は極めて歴史的なそれであるといわなくてはならない」(三二五ページ)という。この「したがって」という言葉には、三上教授自身がその意図に反して犯している、非歴史的な判断が感ぜられないであろうか。

平均利潤率の成立は、さきの引用につづくマルクスの言葉を三上教授が要約したところによれば、つぎの諸条件を

前提としている。「(1)資本が可動的であること……〔さらにその前提として〕、(a)社会の内部における完全な商業的自由、(b)自然的独占以外の……あらゆる独占の排除、(c)自由にされうる社会的資本の無組織的大量を……集積する信用制度の發展、(d)資本家たちの支配への種々の生産部面の従属、(e)人口の大きな密度。(2)労働力を一部面から他の部面へ、また一つの地方的生産点から他の地方的生産点へ移すことの迅速性。〔さらにまた〕このための前提として、(a)労働者の移動を妨げるあらゆる法律の廢止、(b)自分の労働の内容にたいする労働者の無関心、(c)あらゆる生産部面における労働の、簡單労働への可能なかぎりの還元、(d)労働者たちの間でのあらゆる職業的偏見の根絶、(e)資本制生産様式のもとへの労働者の従属」(三二五—六ページ)がそれである。これらの諸前提をマッシーの時代のイギリスがどの程度にみたしていたであろうか、いったいマニユファクチュア時代の労働者がここに指摘されているような立場と意識とをどの程度持ったのであろうか。

ところが、歴史的事実についていえば、産業革命前夜のイギリスでは、一面では労働者の地域的移動は——通説ほどでなくとも——まだ円滑ではなく、プロレタリアートとしての彼らの社会的陶冶は不十分であったが、他面では資金の広汎な移動がおこなわれるようになっており、これを前提として、すくなくとも特定の製造業部門——たとえば製鉄業——にあつては、生産価格範疇の成立を示唆するような利潤率の平均化が生じていた、とする見解が、経済史家の側から新たに提出されている。それはセヴァーン河畔のビッドリで立った鉄の相場の分析によつて、大河内曉男教授が提示されたものである(同著『近代イギリス経済史研究』(一九六三年)第三章)。三上教授は、自説の裏づけに最も有利と思われる大河内教授のこの書に言及することがなくて終つた。しかし、大河内教授がその主張にみずから付したさまざまな制限をここで挙げないとしても、問題は結局、経済学史の展開と経済史の展開とは、單純な並行関

係に立つものではなく、個々の分野での経済理論の学史的な位置と意義とは、理論全体の体系的展開のなかで判断され、評価され、そのうえで理論と歴史との関連があらためて問われなければならない、ということなのである。

この意味で、三上教授の労作は、学史の方法論を深く考えるにあつた試金石という意味をも担っている。――
上述のように、マッシーはそのコレクションの読破の結果、「経済学確立のための歴史的説明」の必要を信ずるようになったが、彼のこの体験を整理して示した前掲の『経済学論』(vii+25 p.)の内容を、三上教授はその作成したマッシーの書目で解題するという、「本書においてマッシーは、①経済学的事実の組織的国家的な蒐集とその体系的な保管、②経済史概論の編集、③経済・事業に従事することと経済学をよくすることはまったくの別問題である」と、④経済的知識がよつたつ確固たる原理を発見するであろう人々によつて取り扱われる紳士にふさわしい教養と学問の一分科としての経済学の承認「この文意やや不明」、とを主張している。さらに経済学の促進に役立つ産業各部門の歴史的説明をよくするために、諸事実・数量等を一六の項目に分類・整理することをすすめる。またイギリス産業の維持を①ヨリよき原料の所有、②労働と航海の自然的優位、生産技術の優秀性、④外国製品よりの保護の諸要因にもとめている」(書目、二一ページ)。これがべつだん経済学における歴史的方法というほどのものでないことはあきらかであろう。そうして、右の一六の項目の内容は、工業の各部門について、「第一、その工業がイギリスにはじめて確立された時、およびその方法、……第四、かかる工業がはじめて建設された国家・都市等の名前、……第八、原材料の主要種類別の年々の価格、……第一六、かかる工業部門が、それに雇われている人々の健康・体力・習慣にあたる作用にかんする物理的・政治的考察」(五七―八ページ)等を恣意的に列挙したものにすぎないのである。マッシーの方法論一般もまた、三上教授の労作の序説によれば、やはり平凡なものであることを免れない。それは「自明

の真理」や「不変の原理」を強調して、三上教授によれば「原理によって統一された理論体系の構成」(五〇ページ)を求めているが、そのための、交換価値の分析という糸口をつかめないままなのである。こういうマッシーが、はたしてどれだけの歴史的洞察をもつて、一般利子率・平均利子率の把握をおこなったのであろうか。

三上教授はジェイムズ・ステュアートの『原理』にしばしば言及し、ことにその利子論をやや詳しく分析して、ステュアートが利子の源泉を利潤にみとめ、利子率を資金の需要供給の原理に依存させたことを、その他の理論的制約とともに確認したのちに、「わたくしは利子率は富の増加につれて低下しないと結論する。利子率は豊かさに依存しない多くの事情によって左右されるからである。利子率は国民の精神や生活様式に依存し、それとともに変動するであろう」(*Principles, Works, iv, p. 327*)と述べた言葉について、ステュアートのせつかくの理論的貢献がついに国民の精神や生活様式(*spirit and manners of a people*)といった非経済的要因への依存によって減ぜられたというふう論断しているが(二二二ページ)、ステュアートのばあいの国民の精神や生活様式とは、けつしてたんに非経済的要因ではなくて、政治算術的(マッシー)にでなしに社会構成的に歴史を把握してその視点を経済学体系のなかに持ちこもうとする方法論的意図にかかわる概念であつて、この事実の無視には、すぐれた経済学史的労作である『近代利子論の成立』の方法論的欠陥の一端が示されているように思われる。三上教授が利子論史の歴史的背景に十分に留意していることは、そもそも近代利子をその歴史的 성격において捉えようとするその根本的立場からも、また本書の全巻にわたる各所の叙述からも知ることができるが、固有の重商主義期のイギリスについての氏の経済史的把握の可否については、また別に検討しなくてはならない問題である。ただ、ここで一つの点だけを指摘しよう。三上教授は第二章の末段で、マッシーにおける政治的および経済的自由の主張と彼の保護主義の思想との並存を「論理的

に矛盾する」と解し、この矛盾は彼が重商主義理論から古典派理論への過渡期の存在だったことにもとづくとしている（二〇四ページ）。しかし、いかにもマッシーは過渡期の理論家ではあったろうが、三上教授の解した論理的矛盾は、マッシーが国内での自由と貿易の保護、および植民地貿易における特定の資本の独占の排除を主張したかぎり、なお原始蓄積期にあったイギリスの現実に対しては、むしろ一貫した論理とこそいうべきなのである。

『近代利子論の成立』は学史的モノグラフィーとして貴重な労作であり、マッシーにかんする最高の基礎的研究である。それはまたそういうものとして、著者の情熱的な主張（三五〇ページから三五三ページにかけて、四五行にわたる一センテンスがある！）と独自の方法とによって、学史研究にかんしてわれわれに多くのことを考えさせる著作である。わたくしはふたたび三上教授の沈潜に敬意を表したいと思う。

（一九七〇・五・三）